慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	越境するファシズム： ダイアナ・ミットフォードとBUFのナチスへの接近
Sub Title	Fascism across borders: Diana Mitford and BUF's approach to German Nazi Party
Author	山本, みずき(Yamamoto, Mizuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2021
Jtitle	法學政治學論究：法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.129, (2021. 6) ,p.131- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20210615-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

越境するファシズム
――ダイアナ・ミットフォードとBUFのナチスへの接近――

山本みずき

一　はじめに
(一)　研究概要
(二)　問題意識
(三)　先行研究
二　流動化する英国の政治文化
(一)　政治文化の変容
(二)　開かれた社交界
三　ナチズムへの接近
(一)　オズワルド・モーズリーとの出会い
(二)　ヒトラー政権の成立
(三)　ヒトラーとモーズリーの架橋
四　おわりに

一　はじめに

㈠　研究概要

ファシズムは、かつて世界規模の教義となった従来の政治運動と異なるものではない。偉大な政治的信念は代わる代わる世界規模の運動となってきた――保守主義、自由主義、そして社会主義はほとんどすべての国において一般的なものである。保守主義者や自由主義者を自称する英国人は、外国政党が同じ名称を冠しているからといって、外国の教義をとり入れているわけではない。彼は、すべての国で目に見えて組織化されている政治思想を、英国流のやり方と英国らしい形態にて発展させることを模索している。

この点において、ファシストもまったく同じ立場を採る――彼の教義もまた世界規模のものである。しかし、まさしくその方針を方向づける国柄ゆえに、彼は従来の政治運動よりも明確に英国らしい手法と形態を模索しなければならない。(1)

これは、戦間期の英国でファシズム運動を率いたオズワルド・モーズリー（Oswald Mosley）の言葉からの引用である。モーズリーは、ヨーロッパ大陸に存在したファシズムを純粋な形で輸入するのではなく、それを英国特有の文化や歴史と融合させ、英国流ファシズムを生み出そうと考えていた。たしかに社会主義にしても自由主義にしても、普遍主義的なイデオロギーが実際の政治において実践される場合には、それぞれの国の歴史や文化によって異なる様相をみせることが一般的であろう。同じようにモーズリーは、ヨーロッパ大陸におけるファシズムを英国の政治文化に根差したファシズムへと変異させることが可能であると考えていた。それ故、モーズリーが英国において展開した

ファシズム運動は、果たして当時のヨーロッパ大陸で浸透していたイタリアやドイツにおけるファシズムと同様の思想であるのか、あるいはそれは異なるものであるのか、これまで論争が見られてきたのである。

ヨーロッパ大陸におけるファシズムを、英国特有の文化や歴史と融合させることによって「ブリティッシュ・ファシズム」を生み出そうとしたモーズリーは、次のようにも論じている。すなわち、モーズリーが英国においてファシズムを実践する場合に、「それは他国のイデオロギーをそのまま輸入するという意味ではなく、我々は英国という国柄にあうような英国流のファシズムを考えている」。「それ故、合言葉は『英国第一（Britain First）』なのだ」[2]。

それでは、このオズワルド・モーズリーとはいかなる人物であったのか。

モーズリーとは、第一次世界大戦が終結した一九一八年に、二二歳の若さで当時最年少の議員に選出され、その際立った弁舌の才能と行動力から、保守党と労働党のいずれの側からも将来を嘱望された人物である[3]。一九二九年に成立した第二次マクドナルド内閣では外務大臣の候補者として名が挙がり、年齢を理由にその計画は潰えるも、三三歳にしてランカスター公領相[4]の地位を与えられる。ラムゼイ・マクドナルド（James Ramsay MacDonald）からは首相後継者として考えられていたほどの期待を集めた[5]。若き閣僚として活躍していた彼は、世界恐慌の最中、一九三〇年に自ら提案した失業者対策の構想が労働党内で却下されると、大臣の地位を手放し、労働党を離れて自ら政党を立ち上げるという異例の道を進む。その党こそが、後に英国にファシズムの風を巻き起こした英国ファシスト連合（以下、BUF）の前身にあたるニュー・パーティ（the New Party）である。その同一人物が、自らの政治運動の方針を集約して「英国第一」との標語を掲げ、議会体制が有効に機能していない現状を前にファシズムによる政治体制を確立することを通じて、政府が強権化することの有効性を訴えたのは一九三二年のことである[6]。

モーズリーに率いられたBUFは、ベニート・ムッソリーニ（Benito Amilcare Andrea Mussolini）の指導を受けてその活動を開始した[7]。結党前にイタリアに足を運んだモーズリーは、イタリアでの国家ファシスト党の成功ぶりを目の

当たりにして、イタリアでできることが、英国でもできないはずはないと確信するようになった。[8] その頃のイタリアはムッソリーニが独裁制の基盤を固めたあとで、高速自動車道路の建設や鉄道の電化、はては土地改良などの華々しい事業が進められた、ファシズム政権の最盛期だった。帰国後、国家ファシスト党のシンボルを模倣した党旗を掲げ、党員の制服にはイタリアの黒シャツ隊と同様の黒い制服を定めた。同時代の英国では、イタリア訪問時に撮影された、ムッソリーニとモーズリーが肩を並べた写真が紙面を飾ることも度々あった。[9] しかしムッソリーニとの交流は次第に減っていき、一九三六年には党名を「英国ファシストおよび国民社会主義者連合（British Union of Fascists and National Socialists）」に変更し、これ以後のＢＵＦは急速に国民社会主義ドイツ労働者党（以下、ナチス）色に染まっていく。

やがてモーズリーはナチスの英国侵攻計画に与する可能性があることなどを理由として内務省から強い警戒感をもって監視される。ところが近年、モーズリーの二人目の妻にあたるダイアナ・ミットフォード（Diana Freeman-Mitford）に関する内務省の史料が公開されるにつれ、モーズリー以上にダイアナに対して内務省が警戒感を抱いていたことが明らかとなっている。[10] それではなぜ内務省は、英国におけるファシズム運動を主導し、その中心的指導者であったモーズリーよりも政治的役職をもたないモーズリーの妻であったダイアナをそれほど警戒したのであろうか。

それは、アドルフ・ヒトラー（Adolf Hitler）と深い関係を有していたのは、他でもないダイアナだったからである。彼女はヒトラーと交友関係を有し、一九三〇年代を通じて頻繁にドイツを訪れた。英国貴族の女性がナチスの党大会に参列する様子は英国内でも報じられたが、第二次世界大戦が勃発する前の時期に、そのことが世間から特別な注目を集めることはなかった。だが、ＭＩ５として知られる保安局はこのときすでに目を光らせていた。[11] やがて第二次世界大戦が勃発するとダイアナは当局からナチスのシンパとして裁判抜きに投獄され、第二次世界大戦中の大半を獄中で過ごすことになる。言い換えれば、英国におけるファシズム運動とすでにヨーロッパ大陸で巨大な権力を確立しつつあったナチスを繋ぐもっとも重要な役割を担ったのはダイアナだったのである。

とはいえ当時は未だ女性参政権が成立して間もない。旧来男性が支配していた政治の世界に女性が入り込んでいく過渡期であり、必ずしも女性が大きな政治的役割を担えるような時代ではなかった。本稿では、やがてモーズリーの妻となるダイアナこそがヨーロッパ大陸におけるファシズム運動と、英国におけるモーズリーの急進主義的な政治を架橋して、繋ぎ合わせる重要な役割を担ったことに注目する。そしてこの一人の女性が、戦間期の英国社会が流動化して、社会階層やジェンダー、国境などの障壁を「越境する」役割を担っていたことを明らかにする。

また、ダイアナがナチスとの関係性を強く疑われたのは、あくまでも内務省の側からの見方であって、実際のところナチスとBUFの狭間でダイアナがいかなる役割を担ったのかについては、その問いを正面から取り上げる形ではいまだ検証されていない。本論文では、ダイアナがドイツのファシズムとブリティッシュ・ファシズムを架橋する際に、イデオロギー的な共鳴のみならず、むしろ経済的な動機がより大きな位置を占めていたことを一次史料をもとに明らかにして、政治的なイデオロギーが伝播する際には多様な動機が混在していることを論じることになる。

(二) 問題意識

そもそも強力なナショナリズムに基づいた国家中心的で排他的なイデオロギーとして理解されることが多いファシズムに、果たして国境を越えた連帯のようなものや、ヨーロッパ全体としての秩序構想が存在していたのだろうか。

ファシズムの定義をめぐる研究はすでに豊富な蓄積がみられるが、一九九〇年代以降はナショナリズムの延長線上でファシズムを位置づける研究が多く世に出た[12]。たとえば一九九一年に刊行され長く読み継がれてきたロジャー・グリフィンの研究は、ファシズムとは「政治イデオロギーの一種であり、その神話的な核心となるのは、一般大衆に向けたウルトラ・ナショナリズムの復活した形態[13]」であると定義した。他にも「国際的なファシズムは考えられない、語義矛盾である[14]」という見解を披露して、ファシズムとナショナリズムは不可分一体の関係にあることを指摘した者

もいる。ロバート・パクストンに至っては「ファシズムは輸出に向いていない。それぞれの国の運動は、民族の再生のために独自のレシピを嫉妬深いまでに抱いており、ファシスト指導者たちは海外の同胞に親近感をほとんど、またはまったく感じない。『国際』ファシズムを機能させることなど不可能であること、それは明白だ」とまで言い切った[15]。かかる議論に基づけば、ファシズムの国境を越えた連帯を本質的に捉えることは受け入れがたいことあろう[16]。このように従来の歴史学がファシズムの特異性とナショナリズムとの深い結びつきを強調する傾向があったことは昨今の多くの研究者から指摘されている[17]。

しかし、近年歴史学において注目を集めているグローバル・ヒストリーの潮流を受けて[18]、ファシズム研究は新しい段階に到達した。それまで一国主義的な枠組みに囚われていたファシズム研究は国境を越えたファシストの結びつきを明らかにする段階へと移行し、ファシズムの国際主義的性質を探ろうとする研究は盛り上がりを見せた[19]。二〇一五年には、トランスナショナルまたはグローバルな文脈でファシズム研究を実践することを掲げた、ＣＯＭＦＡＳ（the International Association for Comparative Fascist Studies）という学会が新たに設立され、研究の蓄積が進んでいる。さらにグローバル・ヒストリーに特化した学術雑誌 *Journal of Global History* においても二〇一七年にはファシズムが特集されるに至った[20]。かつて「語義矛盾である」とまで言われたファシズムの国際的な秩序構想や、各国ファシストの相互のイデオロギー的親和性、友好関係、そして各国のファシストがイタリアのコーポラティズムやドイツの国民社会主義に魅了されていたという事実に支えられて、ファシズムの国境を越えた連帯は可能になったことが明らかになりつつある。

本研究は、ヒトラーやムッソリーニの秩序構想や各国ファシストのイデオロギー的親和性という要因のみからではなく、ダイアナという人間の実利的な動機が、ＢＵＦとナチスの国境を越えた繋がりが生まれる一因となったことを描く。繋がりというのは双方の意思に基づいてなされるものであり、イタリアやドイツの側に存在した秩序構想とは

別に、各国ファシストの思惑もまた描き出す必要があろう。その点で、ＢＵＦをトランスナショナルな文脈から分析した研究は未だ少ない[21]。本稿ではダイアナに焦点を当て分析することを通じて、当時の国際的なファシズム運動の一端を明らかにしたい。

(三) 先行研究

ダイアナに関しては評伝的研究[22]が盛んであるが、他方で英国政治史やＢＵＦ研究の文脈ではあまり光が当てられることがなかった。例えば、第二次世界大戦が終結してまだ一五年ほどしか経っていない一九六一年に刊行されたコリン・クロスによる研究[23]やそれに続いたロバート・ベネウィックによる研究[24]では、モーズリーの二人目の妻としてダイアナの名前に触れてはいるものの、彼女がＢＵＦをナチスに繋げた人物としては紹介されていない。その理由として、史料的制約が最も大きな要因として考えられる。内務省のモーズリー関連文書やＢＵＦ関連文書が公開されたのは一九八〇年代に入ってからであり、モーズリーの自伝が刊行されたのは一九六八年、ダイアナの回顧録が刊行されたのは一九七七年であった。クロスやベネウィックが研究を進めた時期にこれらの史料全てにアクセスすることは叶わず、新聞記事を中心とした限られた史料に頼るしかなかった。

上述の回顧録や公文書が公開されると、政治的過激主義の歴史研究で高名なリチャード・サーローはそれらの史料をバランスよく援用してＢＵＦの包括的な研究を公開した[25]。サーローは、その研究の中でＢＵＦとナチスの関係性に言及している。重要な指摘として、モーズリーとヒトラーの関係性は「単なる商業的な付き合いに過ぎない[26]」こと、さらに内務省によるダイアナの尋問において、彼女がヒトラーやナチス幹部との関係について不明瞭な応答をしたことが内務省の疑念を強めたことを明らかにした。しかしながら、ＢＵＦとナチスが関係性を発展させる上でのダイアナの役割を中心的主題として取り扱ってはいない。

ＢＵＦ研究の中でダイアナの役割が十分に注目されてこなかった理由としては、その発展史やモーズリーの思想を辿る上でダイアナはあくまでも脇役に過ぎず、直接的に大きな影響を与えた人物とは言い難いからであろう。[27] だが間接的とは言え、モーズリーとヒトラーを仲介し、ＢＵＦをナチスに接近させる機会を作り出したのはほかでもないダイアナであった。モーズリーとナチスの関係性を考察する上でもダイアナの存在は鍵となるはずであるが、そもそもＢＵＦと他国のファシズム政党との関係性や両者の比較という視座からの研究それ自体がまだ盛んではないのも、当該分野においてダイアナに光が当たらない一因なのかもしれない。

主として依拠する一次史料は、主要人物の回顧録や著作といった公刊史料[28]、未公刊の公文書等である。ダイアナによるドイツでの出来事の回想を裏付けるにあたっては、ヨゼフ・ゲッベルス（Paul Joseph Goebbels）の独語で出版された日記を手掛かりにしている。また、バーミンガム大学特別史料室（The University of Birmingham Special Collections Cadbury Research Library, Birmingham, the United Kingdom）が所有する未公刊のオズワルド・モーズリー関連文書、シェフィールド大学特別史料室（University of Sheffield Library. Special Collections and Archives, Sheffield, the United Kingdom）が所有するＢＵＦ関連文書、防衛規則18ｂ関連文書を補完的に参照している。内務省やＭＩ５、ロンドン警視庁等の記録に関しては英国国立公文書館（The National Archives in Kew, Richmond, Surrey, the United Kingdom）が所蔵する未公刊文書を用いた。

二　流動化する英国の政治文化

㈠　政治文化の変容

ダイアナは、二〇世紀が幕を開けたばかりの一九一〇年六月一七日に、ロンドンにて生を享けた。幕末から明治初期にかけて外交官として日本に駐在し、激動する日本の観察者として数々の著作を遺した初代リーズデイル男爵たるアルジャーノン・ミットフォード（Algernon Bertram Mitford）はダイアナの父方の祖父にあたる。ダイアナの父デイビッド・ミットフォード（David Bertram Ogilvy Freeman-Mitford）は次男であり、本来であれば貴族の爵位[29]を受け継ぐ立場になかった。だが、ダイアナが生まれた四年後に第一次世界大戦が勃発し、デイビッドの兄であり長男にあたるクレメント・ミットフォード（Clement Freeman-Mitford）が戦死したために、ダイアナの父デイビッドが跡継ぎとなった。翌一九一六年に初代リーズデイル卿が亡くなるとデイビッドは第二代リーズデイル男爵としてその爵位を受け継いだ。こうして祖父から父へと承継されるのにともなって、貴族階級の家庭に身を置くことになったダイアナであるが、彼女が生まれた頃の英国社会は大きな転換点を迎えていた。英国では、一九世紀を通じて伝統的な階級という垣根が揺らいだことで、それまで上流階級によって舵取りされてきた政治文化が変革を迫られ、新たな政治文化が育まれる最中にあった。

階級社会の変動それ自体は一九世紀を通じてみられた現象であったが、なかでも一九世紀から二〇世紀へと移る世紀転換期の時期は、それまで地主貴族が支配していた議会政治の世界がより広い階級に開かれ、大衆の政治参加が制度化されていく時期と重なる[30]。その結果、保守党と自由党が担ってきた二大政党制が形を変え、二〇世紀前半には、現在まで続く保守党と労働党を中心とする二大政党制が形成される。

英国の政治史研究者であるマーティン・ピューは、有権者の社会的階層が拡大する中で、ヴィクトリア時代の後期に下院議員を構成する人々の出自、すなわち社会的基盤が着実に変わったとして、一八六八年から一九一〇年にわたる変容に注目している。この間に地主は保守党議員の中で四六％から二六％に落ち、工業および商業を生計手段とする者は三一％から五三％に増えた。自由党議員の中では地主が二六％から七％に落ち、商工業を生業とする者が五〇％から六〇％に増えた。一方、法律家や他の専門職の議員が、保守党では九％から一二％に、自由党では一七％から二三％に増えている。[31] 一九世紀末までに、従来政治の中心にいた地主貴族階級の割合が落ち、中産階級を主な担い手とする法律家や、工業や商業を生業とする人々が政界に広く入り込むようになった。さらに有権者層が労働者階級まで広がると、二〇世紀の幕開けとなる一九〇〇年には労働党の前身である労働代表委員会（ＬＲＣ）が結成される。[32] その後、ダイアナが十代の時期を過ごす一九二〇年代は、階級社会の変動に一応の区切りがつき、それまで二大政党を形成していた自由党の凋落に伴って、現在まで続く保守党と労働党を中心とする二大政党制が確立された。その頃すでに労働党は政権をとり内閣を組織するまでに成長していた。

下院議員を構成する人々の社会階層が中産階級や労働者階級にまで広がり、労働党が自由党に代わって二大政党制を形成するようになったことは、女性参政権の成立と並んで二〇世紀前半の英国の政治文化の変化を特徴づける出来事である。このようにダイアナが生きた時代は「古い時代」から「新しい時代」への移行期として位置付けられる。階級やジェンダーという伝統的な垣根が流動化したことで、それまで政治の周縁にいた人々が既存の政治文化に取り込まれる時代であった。

㈡　開かれた社交界

一九世紀を通じて起きた階級社会の変動は、以上のように英国の議会主義を支えてきた二大政党に変革を迫ったと

同時に、貴族政治を支えてきたもう一つの排他的な政治文化にさらなる変化を及ぼした。ついには社交界が、上流階級という特定の階層を超えて開かれたのである。そしてそのことは、ダイアナの政治活動の幅を広げる不可欠な土壌となった。

そもそも英国の社交界とは一体何を意味し、社会的にいかなる機能を果たしていたのか。階級社会の変容に着目して優れた英国政治史を著したカナダインによれば、全盛期の社交界は結婚市場としても機能しており、ハイソサエティが社会的政治的営みを行う上で不可欠な舞台であった[33]。上流階級の人々にとって、社交界での交流は議会の会期中の息抜き[34]であると同時に、政治的な営みを担う立場にある以上、食事会は閣僚会議と同程度に重要な意味を持つものだったとされる[35]。この「極めて限定的な層[36]」にのみ開かれていた社交界は、言い換えれば貴族に独占された排他的な社会であり、「そこに野心的なパルヴェヌが入り込むことは非常に困難であった[37]」。パルヴェヌとはフランス語で「成り上がり者」の意である。

ところが社会的エリートとしての貴族の地位が揺らいだことで、それまで上流階級の人々が社交界という排他的なコミュニティの中で行ってきた政治的な営みが、政治の周縁にいた中産階級にも開かれ[38]、二〇世紀以後は階級間の分断を超えた政治的営みが可能となってゆく。それまで社交界の中心にいた地主階級とそれに絡む証券・金融界は一八七三年以降の大不況により没落し、八〇年代以後、そこに付け込んで産業界やアメリカの大富豪、ジェントルマン階級のように、莫大な富を持ってはいるが爵位を持っていない人々が英国の貴族階級に結婚などを通じて入り込む。ウィンストン・チャーチル（Winston Leonard Spencer-Churchill）の母でありアメリカから嫁いだジェニー・チャーチル（Jennie Spencer-Churchill）もまさにそのような時代を象徴する人物である。一八七〇年代に帝国主義がさらに本格化していくと、第六代ケープ植民地首相を務めたセシル・ローズ（Cecil John Rhodes）のように、植民地で財を築いた人々の姿も見られるようになった[39]。

社交界は時代の変化とともに階層と国境を越えて、国内外の財界人、政治家や知識人と交流し得るコミュニティへと変容した。従来の特権的な地位を失いつつあった上流階級に出自を持つダイアナは、名門貴族のギネス家に一八歳で嫁ぎ、十代の頃から社交界で広い人脈を培った。後にナチスに幹部として迎え入れられるエルンスト・フランツ・セドウィック・ハンフシュテングル（Ernst Franz Sedgwick Hanfstaengl）とダイアナが知り合ったのはまさに英国の社交界においてである。そしてこのハンフシュテングルこそが、ヒトラーとダイアナを引き合わせようとし、ナチスの党大会に参加する手はずを整えた人物であった。二人目の夫となるＢＵＦの指導者モーズリーと出会ったのも、社交の場であった。

カナダインは、旧来の貴族社交界の文化は戦間期まで残ったものの、形と機能においてはもはや淡い影に過ぎなかったと指摘するが、ダイアナを通じて戦間期の社交界をみてみると、かつてとは異なる機能を果たしていることが浮かび上がる。むしろ社交界文化の機能はそのまま残り、新たな階層が出入りするようになったことで、ネットワークの形成という観点からすれば社交界の政治的機能は強化されたことが指摘できる。本来閉ざされた空間であったはずの社交界の構成員は階級社会の変動を反映するかのように入れ替わり、そのことは、二〇世紀以降の英国政治において、多様な社会的亀裂を乗り越えた政治活動を可能ならしめた。それまでは貴族のみに開かれていた社交の舞台に、階級にとらわれない政治家や外国人も出入りするようになったことは、ダイアナが準男爵家に出自を持つモーズリーやドイツ国籍のハンフシュテングルと出会う場を提供する契機となる。そこで培った多様なネットワークは、彼女の後の政治活動の幅を広げる礎となった。

三　ナチズムへの接近

㈠　オズワルド・モーズリーとの出会い

それでは何を契機にダイアナはBUFの運動に携わるようになったのか。話を先取りするが、そのことについて本人が明瞭に語った記録がある。第二次世界大戦開戦後、一九四〇年になるとダイアナは防衛規則18bによって、ナチスの共鳴者であることを理由に裁判・起訴なしに逮捕され投獄された。拘留中にダイアナが内務省職員から受けた取り調べでは、その質問の数は記録に残されているだけでも二八〇問を超える。ダイアナは、BUFの一員としてナチスと関わりを持っていることが内務省から安全保障上の脅威であると見做され投獄されたのだが[40]、もしその罪を逃れたいのであればナチスとの関わりを否定し、自らがファシストであることを否定する必要があった。しかし彼女は、その取り調べにおいて自らがファシストであることを表明し、その信条を植え付けた要因について次のように供述している。

Q. あなたはどのようにしてファシストになったのですか。何がその信条を植え付けたのですか。
A. モーズリーがそのことについて私に多くを教えてくれました。
Q. つまりオズワルド・モーズリーがあなたをファシストへと導いたということですか。
A. はい。
Q. モーズリーと出会った日が、あなたがファシズムの信条と関わりを持ち始めた日だと断定できますか。
A. はい。あの時、挙国一致内閣がこの国を率いていたと記憶していますが、私は常に挙国一致内閣に強く反対していました。

一九三一年の選挙のことをよく覚えています。保守党で農業大臣を務めた私の義父との関わりを除けば、あの瞬間が、私が政治に本当に関心を持ち始めた時期です。もしロイド・ジョージが政党を率いてくれていれば私は恐らく彼に投票しただろうと思いますが、もちろん彼の選挙区は私が住んでいた地域ではありませんでした。(41)

ここでダイアナは自らが政治に関心を持ち始めた時期として「一九三一年の選挙」に触れているが、一九三一年の英国社会はどのような状況にあったのだろうか。

一九三一年九月、英国では国王ジョージ五世（George Frederick Ernest Albert）の要請によりマクドナルドを首班として挙国一致内閣が発足した。新内閣の喫緊の課題は未曾有の世界恐慌に有効な手立てを講じることであった。一九二九年のウォール街での株価暴落に端を発する経済不況は英国においても大量の失業者を生み出し、その数は二七五万人を数えた。実に有権者の一割が失業していた計算になる。世界恐慌以来、政権の座にいた労働党のマクドナルド内閣はその危機を打開することができずにいた。故にマクドナルドへの風当たりは強まり、ジョージ五世に辞任を申し入れるべく宮殿に参上したところ、ジョージ五世はマクドナルドの辞任を断固として認めず、挙国一致内閣を組閣することを命ぜられる。やむなくマクドナルドは国民の民意を問うべく総選挙に打って出たが、その際労働党内でもマクドナルドに対する反発は強く、マクドナルドは党首を解任される。結果は挙国一致政権が過半数を獲得して新内閣は始動したものの、首相マクドナルドは所属する労働党から距離を置いて新内閣を運営することになった。(42)

この時ダイアナは二一歳になっていた。人生で初めて政治参加の機会が与えられた選挙がこの一九三一年の総選挙だった。一九世紀以来、英国では選挙法の改正によって有権者の拡大が図られ、一九二八年の第五次選挙法改正により初めて二一歳以上の女性に選挙権が認められた。だがダイアナはこの時選挙権を行使していない。その当時を次のように回想している。「困窮した地域では何百万人もの失業者がわずかな給付金によって辛うじて生きていました。

栄養は足りず、人々が密集した環境は、とても褒められたものではなく、その光景を無視したり忘れたりすることは不可能でした。労働党はこの問題に対処することに失敗し、保守党は最小限度の為すべきことについて考えることはできましたが、ともかくも急進的な改革は不可避でした。（中略）マクドナルドとボールドウィンの指導下で、能力があり独創的で勤勉な国民の才能を無駄にしたことは、怒りと共に、疑いなく不要な貧困を招いたのです」。そして総選挙の結果、引き続きマクドナルドを首班とする挙国一致内閣が誕生したことに対して、「馬鹿の象徴たるラムゼイ・マクドナルドが首相として、盛りを過ぎた保守党員が多数を占める政権を率いるというのは、当時の若者にとって、どうしようもないほど不適切な内閣に思われました」と辛辣な言葉を綴っている。[43]

さらに彼女は当時の社会状況を次のように回想する。「（経済不況にも拘わらず）富を持つ人々は、経済危機前から大して変わらない生活を続けていました。若い人々は相変わらず、パーティ、舞踏会、コンサート、オペラそして芝居、海外旅行やカントリーハウスでの催し、狩猟、射撃、レースなどを楽しんでいました」。[44] ダイアナは貴族の家に生まれ、名門のギネス家に嫁いだことから、この経済不況の中で必ずしも自らの生活が脅かされていたわけではなかった。それでも、明日をも知れぬ生活を強いられた失業者が溢れる最中、ほんの一握りの人間が遊びに興じる社会を見て、不満を募らせていたようである。

このような時期に出会ったのが、経済状況を改善すべく奔走し、大臣の職を辞して新たな政治運動を起こそうとしていたモーズリーだった。モーズリーとダイアナは、あるパーティの席上で席が隣り合わせになり初めて面識を持ったのだが、[45] 交際範囲が重なっていたこともあり、モーズリーはそれまでにも何度かダイアナを見かけたことがあった。最初はフィリップ・サスーン卿（Philip Albert Gustave David Sassoon）がパークレーンの壮麗な館で催した舞踏会だった。「その人はバラの巻きついた柱の間で、輝いて見えた」とモーズリーは自叙伝の中でダイアナを初めて見かけたときのことを回想している。[46]

一四歳離れた二人は社会的出来事の記憶が異なっていた。第一次世界大戦の勃発を、ダイアナは四歳で経験したのに対して、モーズリーは一七歳で経験した。彼の従軍体験や史上最年少で熟練の政治家たちと渡り合ってきた議会経験とその幅広い人脈は、ダイアナの目には魅力的に映ったのだろう。「彼には何もかも揃っていました」と、ダイアナは四四年後に、『陰影に富んだ一生涯（*A Life of Contrasts*）』というタイトルの自叙伝でモーズリーを称賛している。「彼は自分自身と自分の考えに対して確固たる自信がありました。我々が生きていた時代の悲惨な経済状況に対して何をすべきかを知っていたのです。明快で、論理的で力強く、説得的で、彼はすぐに私を確信させました。彼は、答えを知っているただ一人の人物に思えたのです」[47]。引用した一文は、当時の経済状況を危惧するダイアナが、モーズリーの主張に共鳴し、彼ならばダイアナが理想とする社会を実現してくれるのではないかと期待を膨らませていた様子をうかがわせる。

二人が出会った翌年の一九三二年、二二歳を迎えた彼女のバースデー・パーティーで、モーズリーは初めて、ダイアナに熱烈な愛を告白する[48]。そのときモーズリーには大切な妻シンシア（Cynthia Blanche Mosley）がいて、ダイアナにも夫ブライアン（Bryan Walter Guinness）がいた。しかしダイアナはモーズリーと不倫関係になる道を選んだ。「彼はハンサムで、雅量があり、知性的で、しかも生きる喜びに満ちあふれていました。もちろん私は彼に夢中になり、彼とともに生きる決心をしました」[49]と、後年に当時の心情を吐露している。モーズリーが自らのニュー・パーティを解党して、ファシズム政党を標榜するＢＵＦを立ち上げたのは、それからわずか四ヵ月後、一九三二年十月の出来事だった。ダイアナは、党員として政治運動に加わり、以後ＢＵＦの発展に深く関与する。

以上の描写ではダイアナの回顧録に多くを頼ったが、回顧録の使用については細心の注意が求められよう。第二次世界大戦後に刊行されたダイアナの著作は基本的に名誉挽回のために自己正当化を図るものであり、使用する価値はないと退ける研究者もいるほどである[50]。だが、一九三一年に成立したマクドナルド内閣に対するダイアナの危惧は、

第二次世界大戦が勃発したばかりの一九四〇年の段階で内務省の記録に残されているものであり、この主張は戦前から一貫していると見てよいだろう。しかしながらそのような前提に立っても、以上で描いたようにダイアナが一九二九年の経済危機と一九三一年の挙国一致内閣成立を受けてファシズムに向かったと理解するのには限界がある。そもそもファシズムそれ自体は英国の経済危機を克服するために構想された政治イデオロギーではない。冒頭に引用した通りモーズリーは英国流のファシズムを構想しており、その中で経済政策は確かに大きな位置を占めていた。他方で貧困や階級的不平等に問題意識を持った場合、政治学者ハロルド・ラスキ（Harold Joseph Laski）やＬＳＥを創設したシドニー・ウェッブ（Sidney James Webb）のように社会主義や共産主義に向かうのが当時の英国の知識人の傾向であり、もしダイアナの問題意識が国内の惨状を改善することにあったのであれば、そこから一直線にファシズムに向かっていくのには無理がある。あるいはファシズムに共鳴するのであれば、モーズリーと出会う前から英国内に存在していた英国ファシスト党（the British Fascists）等のファシズム政党に加わることもできたはずである。さらに当時上流階級の人々が経済不況の最中に遊びに興じていたことを非難しながら、その実自身も社交界での交流を好み、モーズリーともパーティの席で出会っている。

むしろ時代の寵児として持て囃され、政界という狭い世界に留まらないモーズリーとその広い人脈はダイアナを魅了したとみることもできよう。そして次節で詳述するように、やがて彼女がナチスに接近するのは、モーズリーがダイアナから距離を置き、他の女性に近づいた時期と重なっていた。そこで彼女は、社交界で培った人脈と女性という立場を利用して、国境を越えた政治活動を展開してゆく。

(二)　ヒトラー政権の成立

ヒトラーが首相の座についた一九三三年に、モーズリーの妻シンシアは、一三回目の結婚記念日を数日後に控えた

ある日、盲腸穿孔で病院に運ばれた。[51] 虫垂炎自体はそれほど危険ではなかったが、抗生物質のない時代には感染症の恐れがあった。病院に運ばれて三日後、シンシアは腹膜炎を起こし、危篤状態に陥った。そして三三歳でこの世を去った。[52]

シンシアの死後、モーズリーは子供の面倒をみなければならず、シンシアの姉妹に頼っていた。すると間もなくしてシンシアの妹アレクサンドラ（Alexandra Naldera Metcalfe）とも愛人関係に発展し、その年の夏に、モーズリーは彼女を連れてフランス旅行に出かけた。他方のダイアナはすでにブライアンと離婚していた。一人の男のために社会的名声と安定した結婚生活を投げ出したダイアナからすれば、不安も大きかったことだろう。後になってダイアナは、モーズリーとアレクサンドラの関係に嫉妬した時期があったことを明らかにしている。[53] ダイアナがナチスへと接近するのはまさにこの頃であり、モーズリーがダイアナから距離を置いた時期と重なっている。モーズリーが新たな愛人とフランスで過ごす間、ダイアナは、妹のユニティ・ミットフォード（Unity Freeman-Mitford）を連れてドイツに出かけた。[54] ダイアナが旅行先にドイツを選んだ理由の一つは、新政権が誕生したドイツの様子を実際に見たかったからのようだ。[55]

ドイツでは、「プッツィ」との愛称で知られる知人のハンフシュテングルを頼った。ハンフシュテングルはミュンヘンで画商を営む裕福な家の息子で、ハーバード大学に学び、ヒトラーの旧友でもあった。ナチスが一九二三年のミュンヘン一揆に失敗した時に、ヒトラーを自宅に匿ったのがこのハンフシュテングルである。彼はヒトラーが釈放され、しばらく野に下っている時期にも親交を温め、政界復帰のための資金を提供した。ヒトラーが政権を執ると、ナチスの海外新聞局局長（Foreign press liaison officer）に任命されている。[56]

ダイアナとハンフシュテングルは、一九三三年春に、義母リチャード・ギネス夫人（Lady Evelyn Stuart Erskine）の紹介により知り合った人物である。ギネス夫人は当時彼を「ヒトラーの友人であり、ヒトラーが演説を終えて疲れて

いる時に、ピアノを弾いて聞かせている人物」としてダイアナに紹介した。ダイアナにとってハンフシュテングルは客間に招き入れた最初のナチ党員だった。そしてこの時、ハンフシュテングルはダイアナに対して「ヒトラーを紹介するからドイツにぜひ来て欲しい」と申し入れた。新聞で報道されていることを自分の目で見ることの重要性を説かれたダイアナは、数ヵ月後、新政権が誕生したドイツの様子を実際に見るために、ドイツへと向かった。[57] ハンフシュテングルがダイアナを歓迎した意図は、彼女のイングランドに持つ出自と人脈が、ヒトラーが視野を世界に広げる上で役立つと考えたからのようである。[58]

ドイツに到着後、ダイアナはオットー・フォン・ビスマルク（Otto Christian Archibald, Prince of Bismarck）という人物からの招待状を携えて[59]ハンフシュテングルに連絡を入れた。ダイアナとユニティは歓待され、ニュルンベルクで開かれる第一回党大会の特等席のチケットをもらった上、宿泊先まで手配してもらう。八月三一日から四日間にわたって行われたこの大会は、若い二人の心をとらえて離さなかった。

ダイアナはその時の光景を、「党のユニフォームを着た何十万という人々が通りをうずめ、窓という窓には旗が飾られ、盛大なパレードが延々と続きました。湧き上がる歓喜がその場を満たし、ヒトラーが登場すると群衆の間に電気ショックが走ったかのようでした」と綴っている。[60] ダイアナはこれを機にニュルンベルグでの党大会に何度も参加することになるが、ヒトラーが権力を手にして最初となった一九三三年の党大会は他とは比較にならないほどの迫力に満ちていたという。[61] だたし、この時点でダイアナは大してドイツ語を習得しておらず、ユニティに至っては一語も分からなかった。ヒトラーの演説を聞いてもその内容を理解することはできなかったはずで、あくまでも雰囲気に圧倒されただけである。しかしながら、そもそもナチズムというものが、その思想の本質において人びとの支持を集めることよりもプロパガンダや演出によって大衆を魅了することに主眼を置いていたとしたら、ダイアナやユニティがそのようなナチズムに魅了されたとしても不思議なことではない。二人がドイツ語の習得に励んだのはその後の話で

ある。

この光景をみたユニティは衝撃を受け、「いつかヒトラーに会えるだろうか」と一日に二度も三度も口にした。[62]そして両親に「自分をドイツに一年滞在させて」くれるよう説得し、語学留学という名目で両親からの許しを得ることに成功した。[63]単身ドイツに渡った彼女は、ドイツ語の勉強に励む傍ら、ヒトラーを一目見てみたいという衝動を抑えきれず、ヒトラーがときどき昼食をとると噂されていたオステリア・ババリアというレストランに通いつめた。ヒトラーがこの店に出入りしているという噂は本当で、事実、ユニティはここで何度もヒトラーを目にすることになる。するとヒトラーも次第にユニティの存在を認知し始め、ある時ヒトラーのほうから声をかけた。これを契機に、ユニティはヒトラーとお茶や食事を重ねるようになる。ユニティの日記によれば、一九三五年二月の初めての出会いから、一九三九年九月の開戦前夜まで、ヒトラーとは計一四〇回会っており、平均すると実に一〇日に一回の割合である。[64]

ダイアナが初めてヒトラーと接触したのは、ユニティがヒトラーと面識を持った直後の一九三五年三月のことだった。ミュンヘン滞在中に、ヒトラーと例のオステリア・ババリアで偶然居合わせ、ユニティの引き合わせによって、共にテーブルを囲んで食事をした。[65]これを契機に、以後四年に亘り、ダイアナはヒトラーと何度も顔を合わせる仲となった。なお、モーズリーはこの時点でまだヒトラーと面識がなく、ダイアナとは対照的にその後も指で数える程度にしか会う機会がなかった。[66]

㈢　ヒトラーとモーズリーの架橋

ユニティからヒトラーを紹介されて以来、第二次世界大戦が勃発する一九三九年九月までの間に、ダイアナは頻繁にドイツを訪問し、ヒトラーをはじめナチス幹部との親交を温めた。MI5や内務省の記録では一九三七年に七回、一九三八年に八回訪問している。[67]またナチスの宣伝相ゲッベルスの日記によれば一九三六年に少なくとも一〇回以上

はヒトラーを訪ねている。果たしてダイアナは、どのような動機に基づいてナチスに接近したのか。そしてナチスとBUFの狭間でいかなる役割を担ったのか。

ダイアナの自叙伝にはヒトラーの人柄やナチス幹部との思い出についての記述は豊富にあるが、政治的な話から遠ざかるものばかりで、その上、本人が両政党の狭間でいかなる政治的役割を担ったのかについてはほとんど記述がみられない。それに対してゲッベルスが一九二三年から、命を絶つ数時間前にあたる一九四五年五月一日一三時まで、ほぼ毎日つけつづけた日記には、ダイアナやモーズリーとの関わりについて丹念な記録が残されている。それによればダイアナは、「モーズリーによって送り込まれた[68]」人物だと認識されており、ヒトラーやゲッベルスに顔を合わせるといつも資金援助を求めていた様子が記録されている。その最初の申し出は一九三六年四月に行われた。「ダイアナはモーズリーと彼の支持者からの申し出を繰り返しています」と日記に綴られている[69]。これを受けてドイツ政府は、信用取引金融会社モルガン（Kredit Bankhous Morgan）から五〇万～一〇〇万ポンドのローンを仲介する意向をまとめた[70]。日記によれば、年間一〇万ポンドを要求するダイアナに対して、ナチスはまず二千ポンドを提供したようである[71]。

この時ナチスが前向きに申し出を受け入れた理由は、ドイツ語に堪能なダイアナを通じて英国のファシズム運動の情報を得ることで、ゲッベルスの側は彼女を貴重な情報源として捉えていたことや、ファシズム運動の拡大を目論んでいたこと等が考えられる[72]。その証左に、英国のファシズム運動に関する話を伝えるダイアナについてゲッベルスは当初「興味深い」と評しており、さらに資金を提供するのと同時並行で、ゲッベルスは秘密裡にモーズリーの政治運動を監視する特使をロンドンに派遣し、BUFの活動に関する報告を受け取っていた。やがてモーズリーが期待していたほど働いていないことを知ると不満を募らせた[73]。

ダイアナはその後もヒトラーを頼り資金援助を求め続けた。ゲッベルスの日記によれば、ダイアナは顔を合わせる度にモーズリーに資金が必要であることを言い続けたようである[74]。とは言え、ゲッベルスは向こう見ずに援助を続け

るわけではなかった。彼はＢＵＦが資金提供するに値する組織であるか見定めるため、モーズリーの活動の監視役として英国に派遣していたレーデ（Wrede, 実名不詳）という人物に報告書を書かせた。その報告によれば、モーズリー達はナチスから受け取った資金を浪費し、ゲッベルスが期待したような政治活動を充分に行っていないことが明らかとなった。[75] 幻滅したゲッベルスはヒトラーに承諾を得た上で、それ以降ダイアナからの要求を拒否するようになった。[76] 当初は前向きに資金援助を行ったものの、ダイアナからのしつこいほどの要求とその政治運動への不実な態度は、ナチスとＢＵＦを遠ざけた。

一九三七年になると、ダイアナはこれまでとは手法を変え、単に資金援助を要求するのではなく、ビジネスの話を持ち掛けた。その構想とは、ラジオ局の開設だった。ドイツの波長を使用する権利を得て、英国向けの放送局を設立し、宣伝広告費を収入とすることが構想された。[77] そうすることで、ドイツにも英国から外貨が流れるという仕組みになっていた。[78]

だがこの計画に断固として反対したのはゲッベルスだった。宣伝相である彼にとって、自身の支配の及ばない地域向けに放送することは受け入れられなかった。テレビのない時代、ラジオは大衆に声を届けるもっとも強力な政治的手段の一つであり、ゲッベルスはそれを武器として重要視していた。[79]

一方のＢＵＦは、本部を運営するスタッフの人件費、あるいは広告宣伝費、全国を駆け回るモーズリーの活動費など、莫大な資金を必要としていた。党員の会費と、資産家の支援者からの寄付だけではとても足りなかった。[80] この頃、ＢＵＦは破産の瀬戸際に立たされ、本部のスタッフを一四〇人から三〇人まで減らし、七〇％の経費削減を試みるという大胆な改革を行った。[81] モーズリーは自分の財産をはたいて党の財政を支えたが、それでも十分ではなかった。そこで民間のラジオ局をドイツに開設し、英国向けの放送をするというビジネスの計画が構想され、政治色の強いモーズリーに代わってダイアナがその役目を任されたのである。[82]

さらに一九三六年一〇月の段階で、ダイアナとモーズリーはヒトラー列席の下、ゲッベルスの邸宅で極秘の結婚式を挙げている。[83] モーズリーはドイツ語を理解できなかったが、夕方にはナチスの集会を視察し、演説の技法などに関心を寄せていた。[84] モーズリーもまたダイアナと同様に、ナチズムの思想それ自体よりも、むしろ大衆を魅了するその手法により大きな興味を示していたのであろう。

ダイアナが度々ドイツに渡った背景には、モーズリーとヒトラーを引き合わせ、またＢＵＦが活動する上で必要な資金を集めるために、水面下でゲッベルスやヒトラーにラジオ局開設の構想を持ちかけるという目論見があった。ダイアナからすれば心移りの激しいモーズリーを繋ぎ留め、政治運動を展開する上で自分がいかに不可欠な存在であるかを印象づけることを目論んでいたのかもしれない。結果としてダイアナを介して行われた資金援助が、ＢＵＦの財政を多少なりとも支えたことは間違いない。

一方で次のような疑問に捉われるのも事実である。結局のところ、ダイアナ個人の政治的動静が、ムッソリーニとの関係を重視していたＢＵＦの方針に影響を与えて、結果的にヒトラーとの協力関係に重きを置くように組織の方針を転換させることになったのは何故か。

そこにはＢＵＦの組織構造とモーズリーの政治姿勢が関係している。近代的な主要政党には通常、国際部（international department）が設置されており、その担当者が国境を越えた組織との連絡係を担う。他方でＢＵＦは保守党や労働党等の既存政党とは異質な組織であり、対外的な外国の政党との交流に際して担当部署が明確に定められていたわけではない。ＢＵＦはモーズリーの個人政党という色彩が強く、モーズリーの一存でダイアナにヒトラーとの連絡係を担うことを許すような、いわば近代政党の観点からすれば未成熟な党組織であった。

加えて、ファシスト以前のモーズリーの歩みを辿ると、彼は強固なイデオロギーを持たず、その社交性故に影響されやすく、緩やかに思想が変遷していったことが指摘できる。一九二〇年代のモーズリーはとりわけ経済構想を練る

ことに力を注ぐのだが、当時のモーズリーの経済政策の骨格は、ジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes）の影響を受けていた。

第一次世界大戦後の英国では経済不況を受けて、一九世紀英国に根付いた古典的自由主義と呼ばれる経済思想に対する見直しの必要性が広く認知されていた。経済における古典的自由主義とは、「自由放任」を特徴としており、国家が介入せずとも市場は機能するという考え方を基にした思想である。二〇世紀に入ると、経済恐慌や失業、容認し得ないほどの所得格差、貧困が深刻な社会問題となっており、それまで支配的だった古典的自由主義に代わる抜本的な経済思想の改革を主張する人々が出てきた。その主要な論者の一人がケインズである。

モーズリーもまた、失業者問題を前にして、一九二〇年から三〇年にかけて経済および行政改革の構想を練っており、経済学の基礎についてはケインズから学んでいた。[85] モーズリーによれば、ケインズが一般理論を書いたのは一九三〇年以降であり、それまではケインズの書いたものよりも、彼と直接会話をする中で多くを学んでいたという。さらに同時期には米国連邦準備制度理事会（Federal Reserve Board）の経済学者や実務家と会うために米国にも足を運んでいる。[86] 彼がまとめた経済構想については、サマー・スクールでの講義を基にして後に公刊された「バーミンガム覚書」から知ることができる。[87]

こうして一九二〇年代のモーズリーをみてみると、後のイメージとは異なる顔が浮かび上がる。ちなわち、モーズリーは、この問題に対してムッソリーニのような暴力やユニフォーム等のシンボルの利用に訴えるのではなく、あくまでも経済政策によって解決を試みたということである。すでにヨーロッパ大陸ではファシズムが政権を執り、英国においてもムッソリーニに影響を受けたファシズム政党が立ち上がっていたのだが、社会改革を希求する上で、この当時モーズリーが目を向けたのはムッソリーニではなくケインズだった。

他方で一九世紀的な自由主義に欠陥を認める姿勢、議会がより効果的なものになるよう合理化を図ろうとする問題

意識は彼のファシスト期まで引き継がれている。それは例えばBUF設立後の次の一文からも読み取れる。

> 我々は国家の同意のもとで、議会がより効果的なものとなるように合理化をはかり、最新式に変革したい。無益な議論を排し、政府に権限を与えようと我々が考えているのは事実だが、それは行動するためであって、誰かが力を持たない限りは何も実現できないからだ。（中略）
>
> これを自由主義の終焉だと言う人もいるが、我々はこれこそが自由主義の始まりだと言いたい。真の自由主義とは経済的自由のことである。（中略）今日「自由主義」と呼ばれているのは一九世紀的なばかばかしいものであり、真の自由主義は、それを取り除かなければ実現できないのである。[88]

一九三二年になるとモーズリーはBUFを通じてブリティッシュ・ファシズムを標榜するが、その問題意識の核心は経済政策や既存の政治体制を壊すことにあった。それまでにも様々な人間の理論を取り込んでいたモーズリーは、ムッソリーニの影響を受けたことで、ケインズ的な財政支出政策とファシズムの融合を目指した。そしてダイアナを通じてヒトラーとの交友関係が築かれると、とりわけ政治運動面でナチスに近いスタイルを取り込み、思想面では反ユダヤ主義的な姿勢を一層鮮明にする。[89]

二二歳の若さで英国史上最年少の議員に選出され、大臣職を任されるほどに期待を集めた彼は、自ら提案した経済政策が労働党内で退けられると二大政党の枠から飛び出し、新たな政治の道を切り開こうとした。そのモーズリーの内面には、社会に対する責任感と周囲から影響されやすい性格が同居しており、結果として同時代に山積していた諸問題を解決するための処方箋をめぐって、緩やかに思想が変遷していった。

モーズリーの腹心となるW・E・D・アレン（William Edward David Allen）によれば、モーズリーは「ある確固と

した理想のあくなき追求」の結果、所属政党を次々に変えて表面的に無定形な態度を露呈したと指摘している。[90] モーズリー自身はこの「転向癖」について自伝のなかで次のように述べている。「逆説的にいえば私が弁明すべきことは所属政党を次々に変えたことから予想されそうな無定見についてではなく、表面上は変化しても同じ基本姿勢を貫き通したその首尾一貫性についてである。（中略）自分のことをあれこれ述べるとき私は自分の首尾一貫性にうんざりすることがあるくらいである」。[91] つまり本人の意識として基本姿勢は一貫していたのであり、変転したのはその解決策と所属政党であった。ついにはファシズムの中に目指すべき未来をみたモーズリーは、それを英国に輸入して英国流のファシズムを模索する。そのことはダイアナが語った次の一文からも読み取ることができる。「彼は英国型のファシズムが他国のファシズムを超越すると確信していました」。[92] この一文は、ナチスとＢＵＦの橋渡しをしたダイアナもまた、ドイツ型のファシズムが英国型のファシズムと必ずしも同一のものではないと自覚していたことを示唆するものである。

四　おわりに

国境を越えて政治思想が伝播するとき、統一された思想があらゆる地域に広がるのではなく、土地の政治状況や文化によって変異することがある。社会主義や自由主義、デモクラシーなど様々な政治イデオロギーが、それぞれの国の歴史や文化によって異なる様相をみせるのと同じように、戦間期のファシズムもまた越境するなかで形を変え、広がっていった。ヨーロッパ大陸のファシズムがモーズリーを介して英国にたどり着いたとき、すでに純粋な形でのファシズムの姿は失われていた。そのことはモーズリーが述べた次の言葉からも窺うことができる。すなわち、「一八世紀にフランスで始まった自由主義、一九世紀にドイツで始まった社会主義が独自の形で各国に根付いたように、

二〇世紀のファシズムも英国特有の思想や手法に適合させなければならない[93]」。

そして思想が越境するときには橋渡しをする人物が不可欠であるが、伝道者がいつでも純粋な政治理念に突き動かされているわけではないことを本論文ではダイアナを通じて明らかにした。むしろダイアナはナチスによる大衆を魅了するその政治的手法や劇場化された華やかな政治運動にこそ惹かれ、それをモーズリーを通じて英国に取り入れることを求めたのである。さらにはその先にナチスから提供される資金に大きく魅了されていたことも本論文は明らかにした。

そもそも、ファシストを自称してファシズム運動の担い手となった彼女がナチズムの思想にどれほど理解と関心を有していたかは疑わしい。政治に関わろうとする人間は、いつでも純粋な政治信条に突き動かされるわけではなく、利己的な欲望に駆り立てられることもあり、それが国境を越えたファシズムの繋がりを生みだすほどの原動力となることがある。そしてそれがダイアナと同じように、強力なイデオロギーを持たないモーズリーの政治姿勢と結びつくことによって、BUFとナチスの関係が構築されたとみることもできよう。本稿ではファシズムの国境を越えた連帯を、各国ファシストのイデオロギー的親和性という要因に限定することなく、その政治的手法や実利的な動機に基づいた動きもまた重要な要素となっていたことを指摘した。ファシズムが越境し、政党同士が結びつく時、その動機には多様な要因が混在している。

他方で、モーズリー夫妻とBUFのナチスとの関わりを通じて、戦間期ファシズムの国境を越えた繋がりの脆弱性も浮かび上がる。確かに一時期はナチスからBUFに対して資金援助が行われたものの、ゲッベルスの目にはそれは「浪費」と映る使われ方だった。BUFからすれば運営に不可欠な資金だったはずだが、ゲッベルスはBUFの党勢拡大それ自体よりも、より直接的にドイツの対外イメージ向上に結びつく使途を望んでいたのかもしれない。国境を越えたファシズムの繋がりは、それが強固な政治信条による紐帯を伴わないとすれば、各国組織の思惑の違いによる

脆弱性をも同時に孕んでいたことが示唆される。

（1）Oswald Mosley, *The Greater Britain* (Black House Publishing, 2017), p. 9.

（2）Oswald Mosley, 'Does England Need Fascism?,' *Listener*, 22 March 1933.

（3）見市雅俊「サー・オズワルド・モズリーと英国・ファシズムの生成（上）」『西洋史学』第一一七号（一九八〇年）、四六頁。

（4）ランカスター公領大臣は'Chancellor of the Duchy Lancaster'と表記されるため、日本語ではランカスター公領総裁と訳されることもある。この役職は、総括官庁を持たないながらも内閣に席を置く「無任所大臣（Minister without Portfolio）」の一つである。二〇世紀の英国政治においては、無任所相は個別の総括官庁は持たないものの、政府にとっての特別の任務を遂行するために設けられているのが通例だった。詳細については君塚直隆「近代英国政治における無任所大臣の変遷」（『史学雑誌』第一〇七編第七号、一九九八年、六五―八八頁）を参照されたい。

（5）見市「サー・オズワルド・モズリーと英国・ファシズムの生成（上）」五二頁。

（6）Mosley, *The Greater Britain*, 13-31.

（7）ＢＵＦ設立に至るモーズリーの動向については、モーズリーの政治運動を支えてムッソリーニとの面会にも同行したニコルソンの次の日記に詳しい。Stanley Olson ed., *Harold Nicolson Diaries and Letters 1930-1964*, (Athenium, 1980), 31 December 1931, p. 34-27 January 1932, p. 38. 以下、ＨＮＤＬと省略し、日付を付して記すことにする。

（8）*Ibid.*, 長谷川公昭『ファシスト群像』（中央公論新社、一九八二年）、一六一頁。

（9）OMN/B/3/2, the University of Birmingham Special Collections Cadbury Research Library, Birmingham, the United Kingdom にはムッソリーニと交流して以降のモーズリーに関する新聞報道の切り抜きが保管されている。

（10）Julie V. Gottlieb, 'Women and British Fascism Revisited: Gender, the Far-Right, and Resistance,' *Journal of Women's History* 16 : 3 (2004), p. 109.

（11）'Cross Reference by John Curry（MI5）regarding Diana Guinness,' 26 September 1934, KV 2/1363, the Security Service, The National Archives（以下、ＴＮＡと略する）in Kew, the United Kingdom は、一九三四年にダイアナがローマを訪れたこ

とを記録しており、本ファイルにはそれ以降のダイアナの動向が記録されている。

(12) Jakub Drabik, 'British Union of Fascists,' *Contemporary British History* 30 : 1 (2016), pp. 3-4 によれば、一九九〇年代以降に見られるファシズムというイデオロギーの定義をめぐる研究は、その後、Roger Eatwell, Stanley Payne, Zeev Sternhell などに引き継がれた。

(13) Roger Griffin, *The Nature of Fascism* (Palgrave Macmillan, 1991), p. 26.

(14) Walter Laqueur, *Fascism: Past, Present, Future* (Oxford University Press, 1996), p. 218. 似た指摘として、Phillipp Morgan, *Fascism in Europe, 1919–1945* (Routledge, 2003), p. 159.

(15) ロバート・パクストン著、瀬戸岡紘訳『ファシズムの解剖学』第二版（桜井書店、二〇〇九年）、三九—四〇頁。

(16) 主要なファシズム研究においても、国境を越えたファシスト同士の関係については末梢的な言及にとどまっており、体系的な説明はなされていない。Roger Griffin, *Modernism and Fascism: The Sense of a Beginning under Mussolini and Hitler* (Palgrave Macmillan, 2007); Martin Blinkhorn, *Fascism and the Right in Europe 1919–1945* (Longman, 2000); Stanley Payne, *A History of Fascism* (University of Wisconsin Press, 1995); Laqueur, *op. cit.* 例外として Constantin Iordachi, *Comparative Fascit Studies: New Perspectives* (Routledge, 2010), pp. 1–51, pp. 316–57; Morgan, *op. cit.*, pp. 159–89.

(17) 小野寺拓也「ナチズム研究の現在4「ファシスト・インターナショナル」——グローバル・ヒストリーとしてのファシズムI」『みすず』第六八五号（みすず書房、二〇一九年）、一二—一三頁; Arnd Bauerkämper, 'Transnational Fascism: Cross-Border Relations between Regimes and Movements in Europe, 1922–1939,' *East Central Europe* 37 (2010), p. 216.

(18) Ángel Alcalde, 'The Transnational Consensus: Fascism and Nazism in Current Research.' *Contemporary European History* 29 : 2 (2020), pp. 243–252; Samuel Hunston Goodfello, 'Fascism as a Transnational Movement: The Case of Inter-War Alsace,' *Contemporary European History* 22 : 1 (2013), pp. 87–106.

(19) それ以前にも例えば次の研究がある。Michael A Ledeen, *Universal Fascism* (Howard Fertig, 1972).

(20) *Journal of Global History* 12 : 2 (Cambridge University Press, 2017). ↑の特集号には主に以下の論文が所収されている。Reto Hoffman, 'The Fascist New-Old Order,' *Journal of Global History* 12 : 2 (2007), pp. 166–183; Daniel Hedinger, 'The Imperial Nexus: The Second World War and the Axis in Global Perspective,' *Journal of Global History* 12 : 2 (2007), pp. 184–205.

（21）例えばモーズリーがイタリアの国家主導型の諸政策に魅了されていたことが明らかにされている。Alcalde, *op. cit.*, p. 246.

（22）ダイアナ・ミットフォードの評伝としては、以下が代表的である。Anne de Courcy, *Diana Mosley: Mitford Beauty, British Fascist, Hitler's Angel* (Harper Perennial, 2014); Jan Dalley, Diana Mosley: A Life (Faber & Faber, 2000); Jan Dalley, *Diana Mosley: A Biography of the Glamorous Mitford Sister Who Became Hitler's Friend and Married the Leader of Britain's Fascists* (Alfred A. Knopf, 2000); Lovell, *op. cit.*; Lyndsy Spence, *Mrs Guinness: The Rise and Fall of Diana Mitford, the Thirties Socialite* (The History Press, 2015).

（23）Collin Cross, *The Fascists in Britain* (Barrie and Rocklife, 1961).

（24）Robert Benewick, *The Fascist Movement in Britain* (Allen Lane The Penguin Press, 1972).

（25）Richard Thurlow, *Fascism in Britain: A History, 1918–1985* (Basil Blackwell, 1987).

（26）*Ibid.*, p. 217.

（27）なお、フェミニズムの観点からＢＵＦの女性の役割に言及した研究として以下のものがあるが、必ずしもダイアナが中心に据えられているわけではなく、ＢＵＦに加担した女性一般の役割や動機を明らかにしようとする試みである。Martin Durham, *Women and Fascism* (Routledge, 1998); Woonok Yeom, 'Between Fascism and Feminism: Women Activists of the British Union of Fascists,' in *Gender Politics and Mass Dictatorship: Global Perspectives* (Publisher Macmillan, 2010), pp. 107–124; ＢＵＦに与した女性たちに共通する性質を明らかにする試みとして、Julie V. Gottlieb, 'Women and British Fascism Revisited: Gender, the Far-Right,and Resistance,' *Journal of Women's History* 16 : 3 (2004), pp. 108–123. ＢＵＦ内でみられた諸ジェンダー観を明らかにした研究として Martin Durham, 'Gender and the British Union of Fascists,' *Journal of Contemporary History* 27 : 3 (1992), pp. 513–529.

（28）ダイアナの回顧録として、以下の文献がある。Diana Mosley, *A Life of Contrasts* (The New York Times Book, 1977). ダイアナを含めたミットフォード姉妹の書簡集として、以下の文献が公刊されている。Charlotte Mosley, *The Mitfords: Letters between Six Sisters* (Forth Estatem 2012). オズワルド・モーズリーの数ある著作の中で、以下が回顧録として参照される。Oswald Mosley, *My Life* (Thomas Nelson and Sons, 1968). 以下の文献は、モーズリーによる演説集である。Oswald Mosley, *Britain First-Transcript of Osuald Mosley Speech* (Black House Publishing, 2012). 以下の文献はモーズリーによる一連の著

作である。Oswald Mosley, *Automation: Problem and Solution* (Black House Publishing, 2012); Oswald Mosley, *Fascism for the Million* (Black House Publishing, 2012); Oswald Mosley, *The Greater Britain* (Black House Publishing, 2012); Oswald Mosley, *Fascism: 100 Questions Asked and Answered* (Black House Publishing, 2012); Oswald Mosley, *Tomorrow We Live* (Black House Publishing, 2012); Oswald Mosley, *We Fight for Freedom* (Black House Publishing, 2012).

(29) 貴族の爵位は、上位から挙げると、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵となる。その下位に貴族の身分ではないが、準男爵、ナイト爵、ジェントリというタイトルが存在する。

(30) 世紀転換期の政治制度については、Martin Pugh, *The Making of Modern British Politics, 1867–1939* (Blackwell Publishers, 1982) が大衆レベルの制度の形成に注目しているのに対して、Robert Rhodes James, *British Revolution, 1880–1939* (Routledge, 1978) は、より伝統的な中央政治の物語を展開している。David Cannadine, *The Decline and Fall of the British Aristocracy* (Papermac, 1996) は、伝統的エリートとされた貴族階級が社会的政治的影響力を失っていく過程を描いた優れた研究である。

(31) Pugh, *op. cit.*, p. 20.

(32) ＩＬＰ及びＬＲＣの結成については、Henry Pelling, *The Origins of the Labour Party 1800–1900* (Oxford University Press, 1965) に詳しい。

(33) Cannadine, *op. cit.*, p. 344.

(34) *Ibid.*, p. 342.

(35) *Ibid.*, p. 344.

(36) *Ibid.*

(37) *Ibid.*

(38) *Ibid.*

(39) *Ibid.*, p. 345.

(40) 'A Report regarding the reasons for the Order by Secretary,' 4 October 1940, HO144/21995/37–39, Home Office, TNA.

(41) 'Lady Mosley Called and Examined,' HO144/21995/ 16, Home Office, TNA.

(42) 松永友有「世界大戦と大恐慌の時代」木畑洋一、秋田茂編『近代英国の歴史』（〃ネルヴァ書房、二〇一一年）、一四五—

一六〇頁。

(43) Diana, *A Life of Contrasts*, p. 94.

(44) *Ibid.*, p. 95.

(45) *Ibid.*

(46) Mosley, *My Life*, p. 151.

(47) Diana, *A Life of Contrasts*, p. 95

(48) Nicholas Mosley, *Rules of the Game: Sir Oswald Mosley and Lady Cynthia Mosley* (Secker & Warburg, 1982), p. 216.

(49) Diana, *A Life of Contrasts*, p. 98; アンナ・マリア・ジークムント『ナチスの女たち――秘められた愛』（東洋書林、二〇〇九年）、一三七―一三八頁。

(50) Nedra MacCloud, 'Oswald Mosley and the British Union of Fascists: A Brief Historiographical Inquiry,' *History Compass* 4 : 4 (2006), p. 688.

(51) Nicholas Mosley, *Rules of the Game*, pp. 244-254.

(52) メアリー・S・ラベル（粟野真紀子、大城光子訳）『ミットフォード家の娘たち』（講談社、二〇〇五年）、一八五―一八六頁。

(53) 同右、一八七頁。

(54) Diana, *A Life of Contrasts*, p. 106.

(55) *Ibid.*, p. 107.

(56) Christpher Andrew, *The Defence of the Realm: The Authorized History of MI5* (Penguin Books, 2009), p. 189.

(57) Diana, *A Life of Contrasts*, p. 107.

(58) Ernst Hanfstaengl, *Hitler; The Memoir of the Nazi Insider Who Turned Against the Fuhrer* (Arcade, 2011), No. 215 (Kindle) ('I…Bismarck.').

(59) *Ibid.*

(60) Diana, *A Life of Contrasts*, p. 108.

(61) *Ibid.*, p. 109.

(62) *Ibid.*

(63) ユニティ・ミットフォードをヒトラーの恋人として描いた数ある評伝的研究の中でも、邦語文献としては次のものがある。ジークムント『ナチスの女たち』；ヘンリーエッテ・フォン・シーラッハ『ヒトラーをめぐる女性たち』（三修社、一九八五年）。

(64) ジークムント『ナチスの女たち』、一五八頁；ラベル『ミットフォード家の娘たち』、二一六頁。

(65) Diana, *A Life of Contrasts*, p. 123.

(66) Oswald, *My Life*, pp. 388-399.

(67) 'From Croydon Airport regarding Mrs. GUINNESS.,' 18 November 1936, KV 2/1363/7a, the Security Service, TNA; 'From S. B. report regarding Mrs. Diana GUINNESS having left for Berlin from Croydon.,' 23 April 1937, KV 2/1363/9b, the Security Service, TNA.

(68) Hrsg. v. Elke Fröhlich, Die Tagebücher von Joseph Goebbels: Teil1, 3/2, München 2001, 24. April 1936, S. 68. 以下、DTJC: Teil1, 3/2と略し、巻数、日付を付して記すことにする。

(69) DTJC: Teil1, 3/2, 25. April 1936, S. 69.

(70) DTJC: Teil1, 3/2, 24. April 1936, S. 68.

(71) DTJC: Teil1, 3/2, 19. Juni 1936, S. 111.

(72) DTJC: Teil1, 3/2, 31. März 1936, S. 52によれば、「ミットフォード姉妹はイングランドとモーズリーについて教えてくれる。とても興味深い」と述べられている。

(73) DTJC: Teil1, 3/2, 29. Juli 1936, S. 142; 6. August 1936, S. 150; 15. November 1936, S. 252.

(74) DTJC: Teil1, 3/2, 25. April 1936, S. 69; 15. November 1936, S. 252 ; 7. Februar 1937, S. 362.

(75) DTJC: Teil1, 3/2, 29. Juli 1936, S. 142.

(76) DTJC: Teil1, 3/2, 7. Februar 1937, S. 362.

(77) 'Lady Mosley Called and Examined,' HO144/21995, 21, Home Office, TNA.

(78) 'Lady Mosley Called and Examined,' HO144/21995, 21, Home Office, TNA.

(79) Jan Dally, *Diana Mosley: A Life* (Faber & Faber, 2014), No. 4275 (Kindle) ('In…schemes.').

（80） James Barnes, ‘Oswald Mosley as Entrepreneur,’ *History Today* 40 : 3（1990）, p. 11.
（81） Jan Dally, *Diana Mosley: A Life*（Faber & Faber, 2014）, No. 4220（Kindle）（‘At…percent.’）.
（82） Nicholas Mosley, *Beyond the Pale*（Secker & Warburg, 1983）, pp. 135–136.
（83） DTJC: Teil1, 3/2, 17. September, S. 185.
（84） Diana, *A Life of Contrasts*, p. 143.
（85） Mosley, *My Life*, p. 187.
（86） *Ibid*.
（87） *Ibid*.
（88） ‘Does England Need Fascism?,’ *The Listener*, 22 March 1933.
（89） Andrew, *The Defence of the Realm*, p. 193.
（90） James Drennam, *BUF: Oswald Mosley and British Fascism*（J. Murray, 1934）, p. 13.
（91） 見市「サー・オズワルド・モーズリーと英国・ファシズムの生成（上）」、四六頁。
（92） Diana, *A Life of Contrasts*, p. 97.
（93） ‘A World Re-Born Under Fascism,’ *Daily Mail*, 1 May 1932.

山本　みずき（やまもと　みずき）
所属・現職　慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程
日本学術振興会特別研究員（ＤＣ２）
最終学歴　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程
所属学会　日本国際政治学会
専攻領域　英国政治史